OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	中国湖南省長沙学術調査報告
Author(s)	戦国楚簡研究会
Citation	中国研究集刊. 2006, 41, p. 239-268
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60841
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国湖南省長沙学術調査報告

戦国楚簡研究会

一、調査旅程の概要

二〇〇六年九月二日から七日にかけて、戦国楚簡研究会は湖南省長沙市および上海において、学術調査を行った。

二〇〇一年以来、本研究会は、上海博物館の訪問、大阪大学における国際シンポジウムの開催、台湾大学、清華大学、武漢大学において開催された国際学会への参加など、国際的な学術交流を積極的に進めてきた。今回の調査は、昨年度の湖北省荊門・荊州地区の学術調査に続き、本研究会のメンバーを中心とする共同研究「戦国楚簡の総合的研究」（科学研究費基盤研究Ｂ、二〇〇五年度～二〇〇八年度、代表者・湯浅邦弘）の一環として実施したものである。

行程は、以下の通りである（ゴチック体は、後節において詳述するもの）。

九月二日　関西国際空港に集合。空路、上海を経由して、長沙へ。長沙泊。

九月三日　午前、**湖南省博物館**訪問。午後、**長沙市文物考古研究所**、岳麓書院訪問。長沙泊。

九月四日　午前、**湖南省文物考古研究所**訪問。午後、馬王堆漢墓見学、平和堂デパート「三国呉簡」展示見学、**長沙市文物考古研究所分室**訪問。長沙泊。

九月五日　長沙から上海に移動。上海泊。

九月六日　上海博物館訪問。上海泊。

九月七日　上海・浦東国際空港から関西国際空港へ。関西国際空港にて解散。

参加者は、本研究会設立時からのメンバーである浅野裕一（東北大学大学院）・湯浅邦弘（大阪大学大学院）・福田哲之（島根大学）・竹田健二（同）に加え、通訳の郭丹（早稲田大学大学院生）の五名である。この他、湖南省長沙における調査にのみ、北京・清華大学に留学中の福田一也（日本学術振興会特別研究員）が現地で合流して同行した（写真1）。

長沙での移動手段には専用マイクロバスを利用、中国国内での全行程に同行するスルーガイド、長沙でのスポットガイドと併せて、予め旅行社を通じて手配した。

最高気温三十八度という厳しい残暑の中ではあったが、すべての調査活動が円滑に行われ、予想以上の充実した成果を収めることができた。主な訪問先の詳細については、下記の「湖南省博物館」（湯浅邦弘）、「長沙市文物考古研究所」（福田哲之）、「湖南省文物考古研究所」（浅野裕一）、「長沙市文物考古研究所分室」（竹田健二）の各節をご覧いただきたい。本節では、旅程全体に関わる情報、および、右の博物館・研究所以外の訪問・見学先について簡潔に記しておきたい。

まず、訪問予定先には、渡航一ヶ月半前の七月中旬に手紙を送り、来訪の日程と目的を伝えた。筆者（湯浅）は、各博物館・研究所の関係者とは全く面識がなかったが、ちょうど刊行されたばかりの拙著『戦國楚簡與秦簡之思想史研究』（台湾・万巻楼、二〇〇六年六月）を同封して、我々が出土文献研究を積極的に推進している研究団体であることを説明し、協力を要請した。これに対して、各博物館・研究所からは極めて好意的なお返事をいただいた。特に、湖南大学副院長の陳松長教授には、後述の通り、主な訪問先について懇切な御教示と御高配をいただき、また、長沙市文物考古研究所の何旭紅所長からは、長沙市簡牘博物館の宋少華館長（長沙市文物考古研究所分室担当）をご紹介いただいた。これにより、当初予定していなかった長沙市文物考古研究所分室を訪問先に加え、全旅程が確定した。

長沙

調査初日の九月三日は、午前中に湖南省博物館（後述）を訪問し、午後に長沙市文物考古研究所（後述）を訪問した。その後、十六時～十七時まで、岳麓書院（写真2）を訪問した。岳麓書院は、長沙市街から湘江を隔てた西側の岳麓山の麓に位置する。北宋の開宝九年（九七六）の創建で、以後、宋元明清を経て、清末に湖南省高等学堂となり、さらに湖南高等師範学校と改称された後、一九二六年、湖南大学岳麓書院となった。白鹿洞書院、応天府書院、嵩陽書院とともに、中国四大書院の一つに数えられる。

写真1　学術調査参加メンバー（湖南省博物館にて）

写真2　岳麓書院

正門には、宋の真宗から下賜された「嶽麓書院」の扁額が掲げられ、その両脇には、「惟楚有材」「於斯為盛」の対聯が掛けられていた。院内の主な構造物は、講堂、御書楼、文廟などである。文廟は、小規模ながら、孔子像、大成門、大成殿を備える。院内は、市内の喧騒とはかけ離れた閑静な雰囲気に包まれており、ここから、朱熹、王陽明、王夫之、魏源、曾国藩、毛沢東など、近世から現代に至る著名人が輩出したことを実感できた。

また、筆者は、この岳麓書院が「千年学府」と呼ばれ、現在の湖南大学に継承されていることについて、感慨を禁じ得なかった。筆者の勤務する大阪大学文学研究科も、その学問的源流として、江戸時代の学問所「懐徳堂」を有している。歴史の長さは違うものの、同じく、伝統ある学問所を源流とする大学として親近感を覚えた。

翌九月四日は、午前中に湖南省文物考古研究所（後述）を訪問した。昼食には、陳松長教授を招待し、歓談した。陳教授は、湖南省博物館副館長の任にあったが、我々の訪問する直前の二〇〇六年七月に、湖南大学副院長に栄転された。この昼食会では、陳教授が二〇〇八年に、長沙文物の展示のため来日されること、湖南大学と日本の大学間との学術交流を求めておられることなどをうかがった。

昼食後、陳教授と別れ、我々は馬王堆漢墓（写真３）の見学に向かった。一九七二～七四年にかけて発掘された馬王堆漢墓は、現在、三号墓の上に屋根が取り付けられ、墓坑・墓道がそのまま見学できるようになっている。多くの貴重文物が発見された三号墓の大きさを実感できた。また、この裏手には、一号墓の封土が残されており、我々はそこにも上ってみた。馬王堆漢墓は、病院建設のための工事により発見されたものであり、市内の繁華街から意外なほど近い場所にある。

次に我々が向かったのは、市内の平和堂デパートである。ここの地下は、有名な走馬楼三国呉簡十余万枚が出土した場所であり、現在、デパート五階の一角が「平和堂出土文物展・三国呉簡陳列室」（写真４）となっている。ここでは、走馬楼発掘調査の様子や出土簡牘などが、写真・レプリカによって紹介されていた。

思わぬ収穫となったのは、展示室横で販売されていた走馬楼三国呉簡の精巧なレプリカである。我々が購入したのは、木牘二点、簽牌、名刺の計四点をガラスケースに収めて装訂したものである。簡牘の形制や書写状況を口頭で説明するのはなかなか難しく、こうしたレプリカは、研究・教育上、大変有用である。なお、馬王堆漢墓、平和堂とも、見学時間はそれぞれ三十分程度であった。

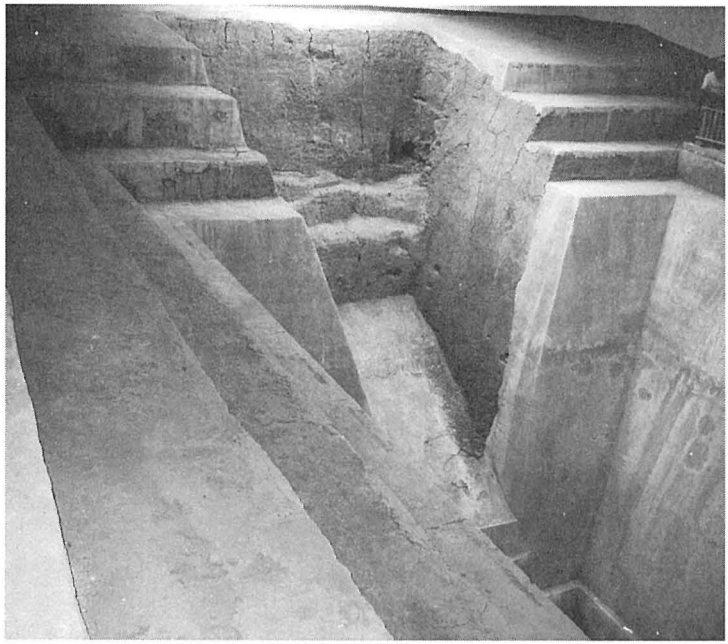


写真3　馬王堆三号漢墓址

写真4　平和堂出土文物展・三国呉簡陳列室

この日最後に向かったのは、長沙市文物考古研究所分室（後述）であり、これにより、長沙での全日程を終了した。

二日間の旅程で、長沙市内の多くの博物館・研究所などを訪問したわけであるが、これは、主な訪問先が市内に集中しており、いずれも車で十～十五分程度で行ける場所にあったことも大きな要因である。もとより、効率よく全行程を消化できたのは、陳松長教授の御高配があったからに他ならない。九月二日夜、長沙に到着した我々は、さっそく陳教授に電話連絡し、湖南省博物館への訪問を改めて確認したが、その際、陳教授は、長沙におけるその他の訪問予定地についてもすべて事前連絡して下さった。二日間の行程に同行していただき、多大の御教示を賜った陳松長教授に心より御礼を申し上げたい。

上海

九月五日に長沙を離れ、上海に移動した我々は、翌九月六日、上海博物館を訪問した。事前に連絡して了解を得ていた李朝遠先生は、あいにく出張のため不在であったが、濮茅左先生が対応して下さり、通訳の姚俊氏を交え、二時間にわたって懇談の機会を与えていただいた（写真5）。

濮茅左先生からは、刊行中の上海博物館蔵戦国楚竹書について多くの貴重な情報を御教示いただいたが、ここでは、主要な三点に限って、以下に簡潔な紹介をしておきたい。

第一は、当初全六冊で完結予定であった『上海博物館蔵戦国楚竹書』が、全九冊程度になり、これとは別に、残簡のみを集めた別冊が刊行されること、また、かなり整った体裁を備える大部の楚簡字書も別冊として刊行されるという情報である。上博楚簡は、現在、中国古代思想史研究において最も注目されている研究対象であるが、これが、六冊に止まらず、全九冊および別冊の刊行が予定されていることは、今後の楚簡研究の展開という点で、大いに注目される。

第二は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』の次の刊行予定である。現在第五分冊まで刊行されている同書については、年一冊の刊行ペースが守られているが、第六分冊も、これまで通りのペースで刊行され、収録文献数も、概ねこれまで通りとのことであった。つまり、第六分冊は、二〇〇七年早々の刊行が予定されているということである。

第三は、上博楚簡の公開に関する情報である。残念ながら、今回、我々も上博楚簡を実見することはできなかった。これは、文物保護の観点から、原則として公開し

写真5　上海博物館
（右から郭丹、濮茅左氏、浅野、湯浅、福田）

ないとの博物館の方針によるという。但し、二〇一〇年に、少数の専門家を招いたシンポジウムを開き、上博楚簡を公開する予定があるとのことであった。

以上、今回の学術調査の概要について記してきた。この調査を企画した当初は、実は大きな不安もあった。全員が始めて訪れる湖南省への旅であり、また、訪問予定先の関係者とは全く面識がなかったからである。しかし、準備段階における各博物館・研究所からの反応は良好で、実際訪問した際にも、懇切な御教示を得ることができた。学術研究における我々の熱意が伝わったように感じられた。

（湯浅邦弘）

二、湖南省博物館

（二〇〇六年九月三日
午前九時十五分～十一時五十分訪問）

九月三日午前九時、宿泊先のホテル（華天大酒店）から専用マイクロバスで湖南省博物館に向かった。約十分で到着。

写真1　湖南省博物館

写真2　湖南省博物館ＶＩＰ室（中央が陳松長氏）

湖南省博物館（写真1）は、長沙市の烈士公園の北側、東風路に面した東側に位置する。一九五六年の創立であるが、その後、一九七二年～七四年の馬王堆漢墓の発掘調査で一躍脚光を浴び、一九九九年に新館が建設され、現在に至っている。収蔵点数は十一万余点、国家一級文物七百余点を誇る。

到着した我々を、陳松長教授自ら玄関で出迎えていただき、そのままＶＩＰ室に招かれた（写真2）。そこでしばし歓談の後、館内を案内していただいた。まず我々が説明を受けたのは、「馬王堆漢墓陳列」室と「湖南十大考古新発現陳列」室である。

馬王堆漢墓文物

「馬王堆漢墓陳列」はさらに三室に分かれており、第一室と第二室では、馬王堆一号墓（長沙国丞相軑侯利蒼の妻・辛追の墓）・二号墓（軑侯利蒼の墓）・三号墓（利蒼の子の墓）の出土状況が説明されるとともに、多くの出土文物が陳列されていた。印章、装飾品、漆器、楽器、俑、遊具、兵器、帛、簡牘、種子、薬など、現世での生活を髣髴とさせる数々の貴重資料に圧倒された。馬王堆漢墓出土の文物は三千点にのぼるという。

第三室には、出土簡帛が展示されており、ここでは、竹簡『十問』十簡、『合陰陽』十簡、『天下至道談』十簡、帛書『陰陽五行甲篇』『周易』『五十二病方』『足臂十一脈灸経』『春秋事語』『養生方』『天文気象雑占』『五星占』の他、「車馬儀仗図」「太一将行図」「城域図」などの帛画、一号墓および三号墓の棺内で発見された、いわゆるＴ形帛画（但し、一号墓帛画は複製品）を実見した。また、地下一階には、「女尸棺槨陳列区」があり、馬王堆一号墓の巨大な棺槨（五層）と墓主辛追のミイラが陳列されていた。

陳松長教授によれば、帛書の保存については、その形態に沿っておおよそ三種に分類しているとのことであった。第一は、一枚物の帛で、そのまま単独でガラスプレートに収めているものである。右に列記した帛書のほとんどはこれに該当する。第二は、比較的長巻の帛で、巻子の形態で保存しているものである。この場合、館内での公開は、長巻の中の冒頭や中間部など、その一部ということになる。右の内の『五星占』「太一将行図」などがこれに当たる。そして第三は、冊子の形態に装訂して保存しているものである。馬王堆漢墓から出土した大量の帛は、このように形態の相違にも留意しつつ慎重に保存・公開されているのである。

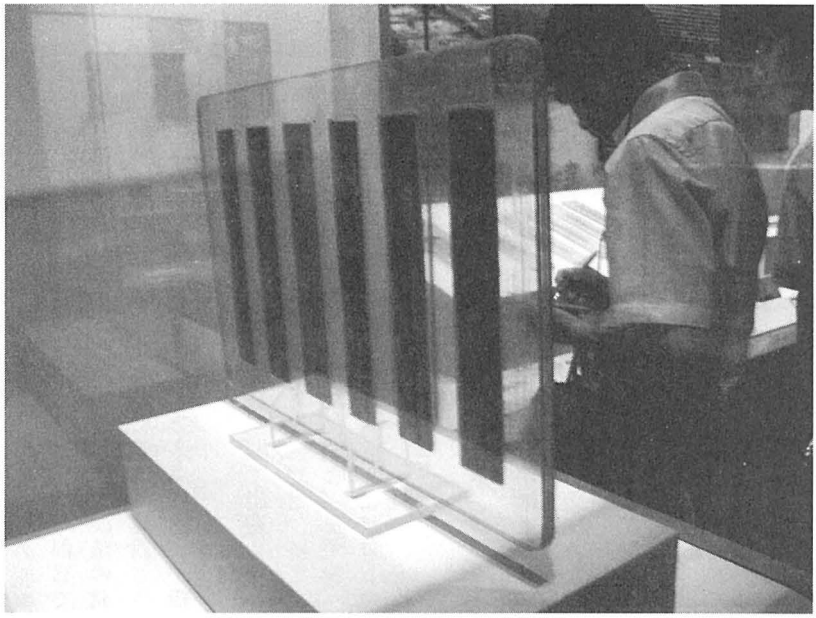


写真3　湖南省博物館の里耶簡牘展示

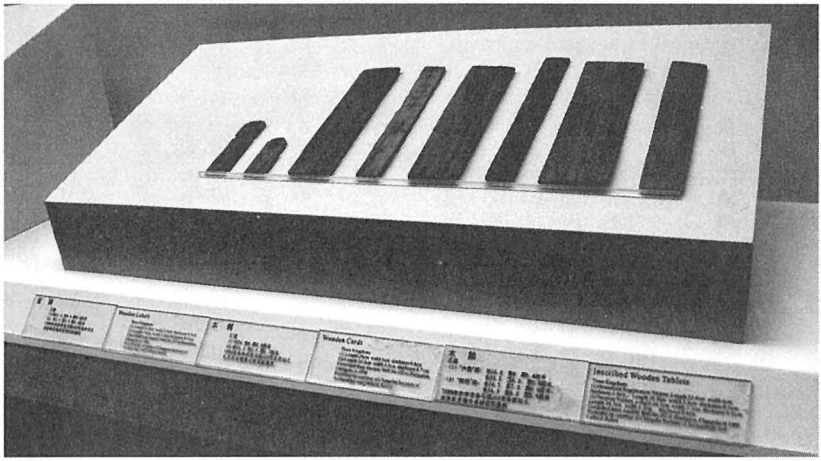
里耶簡牘と走馬楼三国呉簡

次に、「湖南十大考古新発現陳列」では、特に一九八〇年以降に湖南地区で発見された十大文物が展示されていた。古いものでは旧石器時代の化石や石器などもあったが、出土文献研究の立場から何より興味深かったのは、近年発見された大量の簡牘類である。

その一つは、二〇〇二年に龍山県里耶鎮の秦漢城址から出土した簡牘（里耶秦簡）である。この城址からは青銅器、鉄器、玉器などの文物とともに、一号古井から三万余枚の簡牘が発見された。総字数は数十万字に達するという。早くも、「二十一世紀最大の発見」の呼び声も高い貴重な資料群である。里耶簡牘は、表裏両面に文字が記されているものもあるため、展示ケースの中に平に置くだけではなく、六枚の木牘（長さ二二．五～三〇センチ、幅三．五～四センチ）が衝立状のガラスケース内に立てて、両面が閲覧できるようにされていた（写真3）。展示の工夫として評価できる点である。

今ひとつは、一九九六年に長沙市中心部五一広場近くの走馬街・平和堂商厦（デパート）建設地で発見された走馬楼三国呉簡である。館内には、走馬楼J22号古井出土の「大木簡（長さ四九．二センチ、幅三センチ）」

写真4　湖南省博物館の走馬楼三国呉簡展示



六枚、「竹簡（長さ二七．一センチ、幅二．一センチ）」八枚、「木牘」「木刺」「簽牌」計八枚などが展示されていた（写真4）。走馬楼三国呉簡の総数は十余万枚にのぼる。発掘現場を記念して、平和堂の五階の一角が展示室となっていることについては、先述した通りである。

なお、里耶簡牘については「湖南省文物考古研究所提供」、走馬楼三国呉簡については「長沙市文物考古研究所提供」と説明パネルに記されていた。我々は、この日の午後に長沙市文物考古研究所を、また、翌日の午前中には湖南省文物考古研究所を訪問し、これら簡牘の実物に触れる機会を得ることとなる。その詳細については、次節以降において後述する。

博物館の訪問は約二時間半。「馬王堆漢墓陳列」と「湖南十大考古新発現陳列」で我々の所期の目的は達成されたが、博物館には、この他、「青銅器陳列」「湖南名窯陶瓷陳列」「館蔵明清絵画陳列」室などもあった。

（湯浅邦弘）

三、長沙市文物考古研究所

（二〇〇六年九月三日午後二時～午後四時訪問）

長沙市文物考古研究所は、長沙駅前を通る幹線道路五一路の北側、中山路沿いにある船山学社に設置されている。船山学社は、明末清初の学者王船山を記念して辛亥革命後に建てられた学校であり、一九二一年に毛沢東が同所に湖南自修大学を設立したことでも知られる。

マイクロバスを降り、所長の何旭紅先生の出迎えを受けたところへ、ちょうど陳松長教授も到着される。何先生の案内で、「船山学社」の門標と「湖南自修大学」の看板が掲げられた白亜の建物の入り口（写真1）をくぐり抜け、パワーポイントの機材やスクリーンの用意された部屋に通される。緋色の毛氈が敷かれた机上には、すでにガラス板に挟まれた簡牘が並べられ、われわれを待ち受けていた。あらためて挨拶を交わし、著書などを贈呈したのち、まずはじめに、東牌楼東漢簡牘の発掘状況の説明が行われた。何先生・陳教授ほか発掘を担当した所員八名が同席。説明はすべてパワーポイントを使用し、主として発掘担当責任者の黄樸華先生が行い、適宜、他の所員からも補足が加えられた。

東牌楼東漢簡牘発掘報告

東牌楼東漢簡牘に関する説明の概要は、以下の通りである。

東牌楼東漢簡牘は、二〇〇四年の四月から六月にかけて行われた、東牌楼湘浙匯商業大厦工地に点在する古井戸群の発掘調査の際に出土した。東牌楼は三国呉簡の出土で有名な走馬楼の南に隣接し、商業ビル建設に伴う発掘調査であったという点も走馬楼と共通している。走馬楼や東牌楼のある五一広場周辺は、現在、長沙市最大の繁華街であるが、戦国から明清にかけても、歴代の官署が集まる都城の中心区域として機能し続けていたことが、文献資料や考古発掘によって明らかにされている。走馬楼三国呉簡・走馬楼西漢簡牘や東牌楼東漢簡牘は、いずれも廃棄坑として利用されたと見なされる官署の井戸から出土しており、簡牘の大部分は廃棄された官署の文書と推定されている（走馬楼三国呉簡の埋蔵理由については異説もある）。

余談ながら、翌日、走馬楼三国呉簡の出土地に建つ平和堂デパートを訪れた際、東牌楼東漢簡牘出土地はこのあたりであろうかと目をやったが、すでにビルが建ち並んで発掘時の面影をしのぶことはできなかった。しかし、繁華街の喧噪のなかに林立する高層ビルの風景に、ふと

官衙が軒を連ねた古代の官庁街の幻影が重なり、長沙の歴史の重みを実感することができた。

東漢簡牘が出土した七号古井(J7)は、口径一・二〇メートル、深さ七・六〇メートル。層位は五層からなり、第二層から第五層(三・二四～七・六〇メートル)において四二六枚(有字簡牘二〇六枚・無字簡牘二二〇枚)の木質簡牘が出土した。簡牘中にみえる年号は、建寧・熹平・光和・中平の四種で、最早は建寧四年(一七一年)、最晩は中平三年(一八六年)。これらはすべて東漢霊帝(在位一六七～一八九年)期の年号であり、他の簡牘も主として霊帝期に属するものと推定されている。

なお、東牌楼東漢簡牘については、本年四月に文物出版社から刊行された長沙市文物考古研究所・中国文物研究所編『長沙東牌楼東漢簡牘』に詳細な報告が掲載されているので、あわせてご参照いただきたい。

東牌楼東漢簡牘の実見

説明が終わると、いよいよ東牌楼東漢簡牘の実見に移った。あらかじめ用意された手袋を着用し、一点ずつ手にとって詳細に観察する(写真2)。

展示された簡牘は十二点。木牘・木簡の他に封検[二]（以下、[ ]内の漢数字は『長沙東牌楼東漢簡牘』の整理番号を示す）や人形木牘[一一七]など、各種の形制が選定されている。敦煌・居延漢簡以来、図版では周知の封検も、原物を手にとって各方向から形状をつぶさに観察するのは、はじめての経験であった。また、人形木牘は東牌楼東漢簡牘のなかでも特異な形態として知られるもので(写真3)、表裏に記された文章は、熹平元年(一七二)に覃超が死後の世界に上言する形式をもち、従来知られていた墓券や鎮墓文、「冥土へのパスポート」と呼ばれる墓主の身分証明書などとともに、漢代人の死後の世界観を明らかにする新資料として注目されている。

東牌楼東漢簡牘が書体・書法史上きわめて重要な意義をもつことは、すでに劉濤「長沙東牌楼東漢簡牘的書体・書法与書写者」(『長沙東牌楼東漢簡牘』所収)が指摘するところであるが、展示された十二点のなかには、篆書[一五四背]、隷書[二・一五四正背]、早期楷書[一二・一一七正背]、早期行書[二九正背・五五正背]、草書[五一正背・五二正背]といった各書体の代表的な例とともに、[三五正背・三六正背・七〇正背]のような早期楷書と早期行書とが混在した過渡的な状況を示す貴重な資料も含まれており、簡牘の選定に対する行き届いたご配慮をありがたく感じた。

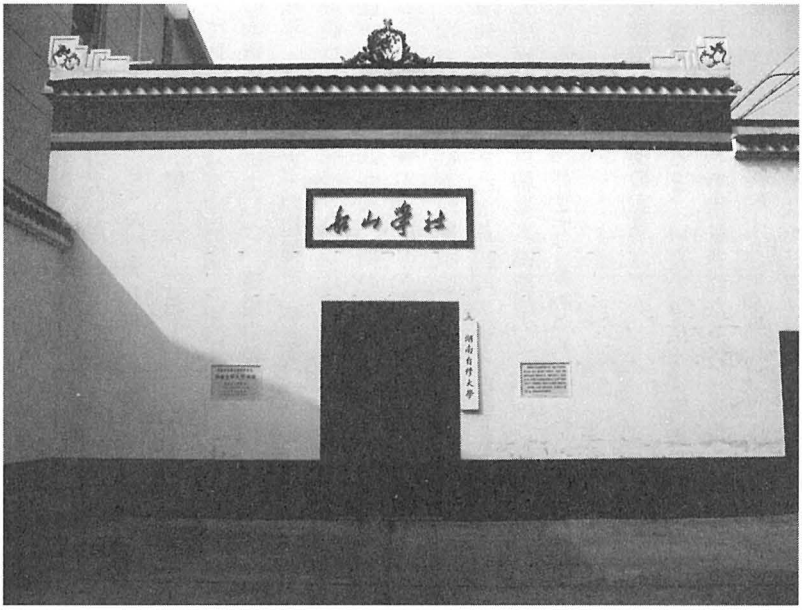


写真1　「船山学社」入り口

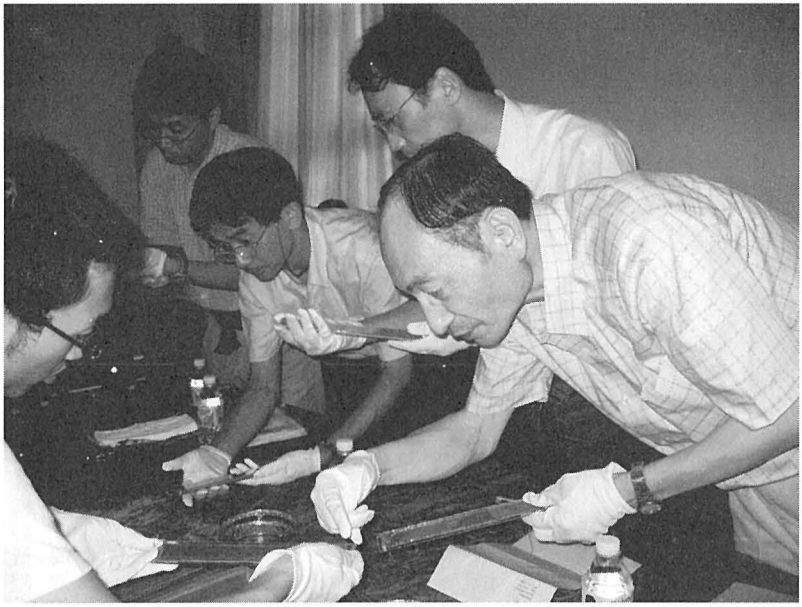


写真2　東牌楼東漢簡牘の実見

写真3　人形木牘

望城風篷嶺一号墓発掘報告

最後に、今年の六月に発掘が終了したばかりの最新情報として、望城風篷嶺一号墓の発掘状況や出土文物などの説明をうけた。概要は以下の通りである。

望城風篷嶺一号墓は、柏の木を積みあげてつくった黄腸題湊とよばれる椁柩をもち、墓葬の形態に特色が認められる。すでに盗掘されており、椁板がくずれて墓室が潰れた状態で出土し、椁板には番号が付されていた。出土文物には、陶器・青銅羊鎮・漆器・銅鍾・玉璧・銅灯(銘文末尾に「長沙元年造」の紀年)・五銖銭などがある(簡牘出土の報告はなかった)。

出土文物についての詳細は検討中とのことであり、墓の年代に関する言及もなかったが、武帝の元狩四年(前一一九)に制定された五銖銭の出土や漆器に記された「宜酒食」の字体などから、おそらく武帝期以後の西漢墓であろうと推測された。また、銅灯銘文中の「長沙元年」についても西暦の何年に該当するかは不詳とのことであったが、先の墓葬年代との関連からすれば、初代呉芮にはじまる呉氏前長沙王国(前二〇二～前一五七)廃絶の二年後に、景帝の子の定王発を長沙王に叙して再興された劉氏後長沙王国の元年、すなわち前一五五年に比定することができるのではないかと思われた。この推測に従え

ば、出土した銅灯は製造後、少なくとも四十年近くを経た伝世品であったことになろう。

いずれにしても、望城風篷嶺一号墓は漢代長沙王国の歴史を解明する上に重要な意義を有するものであり、発掘報告の正式な公表が期待される。

以上が、長沙市文物考古研究所訪問の概要である。最後に、何旭紅先生をはじめとする長沙市文物考古研究所のご高配とご同行いただいた陳松長教授のご厚情に対し、あらためて深甚なる謝意を表したい。

（福田哲之）

四、湖南省文物考古研究所

（二〇〇六年九月四日
午前九時二十分～十二時訪問）

九時過ぎにホテルを出発し、長沙市東風路１２９号にある湖南省文物考古研究所に向かう。この研究所は一九五六年に湖南省博物館の附属研究所として発足したが、一九八六年に独立して現在に至っているという。我々一行を出迎え、所内を案内してくれたのは張春龍先生である。まず張先生の部屋で我々の著作を進呈して挨拶を交わす（写真１）。そのあと張先生は、パソコンの画面に里耶秦簡の発掘記録を映し出して、詳しく説明してくれた（写真２）。

川岸近くに多数の方井が密集する発掘現場の状況や、泥の中に折り重なった木簡が取り出される光景などは、初めて目にするもので実に興味深い。墓の発掘とは異なり、狭い井戸の場合は、人間が内部に入り込んで出土品を取り出すスペースがないため、井戸の側面を切り取って、脇から板を水平に差し込んで木簡を取り出したとの説明には、なるほどと納得させられた。未発掘の井戸が相当数残っているそうで、今後さらに膨大な数の木簡が出土するものと思われる。

里耶秦簡

パソコン画面を使った説明が終了したのち、別室に移動して里耶秦簡十五点の実物を見せてもらう（写真３）。両面をプラスチックで挟んだ状態の秦簡は、すべて公開済みの有名なものばかりであったが、実際に手に取ると、やはり興奮を抑えきれない（写真４・５）。我々は穴のあくほどしげしげと木簡を眺めながら里耶秦簡について語り合っていたのだが、張先生はふと慈利楚簡についても言及され、この建物内に保管されていると話された。

写真1　湖南省文物考古研究所
（左から二番目が張春龍氏）

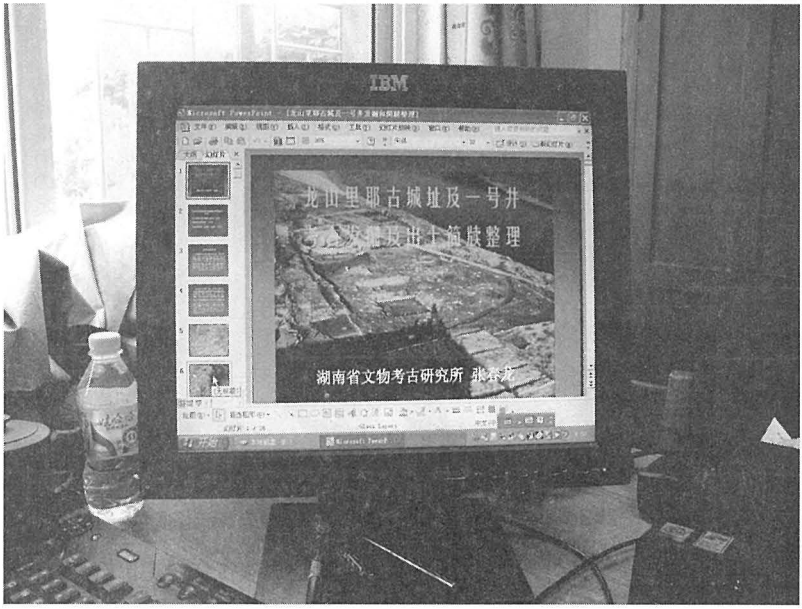


写真2　里耶秦簡発掘の説明

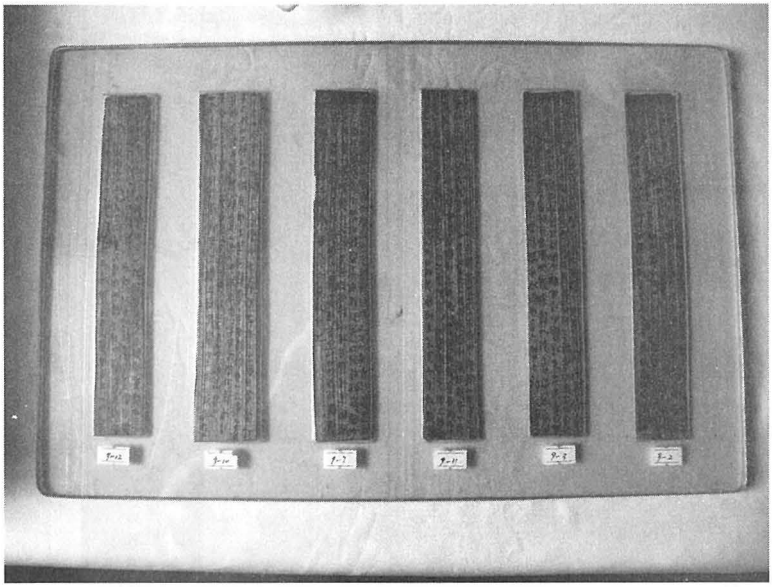


写真3　里耶秦簡

写真4　里耶秦簡の実見
（右から湯浅邦弘、福田哲之、張春龍氏、郭丹）

写真5　里耶秦簡の実見
（左から浅野裕一、福田一也、竹田健二）

写真6　慈利楚簡の実見

慈利楚簡

我々は事前にその情報を掴んでいなかったので、驚くと同時ににわかに色めきだち、是非それを見せて欲しいと頼み込む。すると張先生はただちに快諾してくれ、我々をさらに保管庫と続きになっている部屋に案内し、係りの人に保管庫から運び出して我々の前にならべさせた。ガラス管に入れられた慈利楚簡は、長簡が十四枚、短簡が二十七枚で、我々は各自それを手にとって直接観察する（写真6）。竹簡の表面はやや黒ずんでいたが、そこに記される文字はまさしく典型的な戦国期の楚文字で、郭店楚簡や上博楚簡の文字と瓜二つの印象を受けた。

張先生の説明によれば慈利楚簡の内容は、『国語』呉語と『逸周書』大武篇（大武解第八）、それに管子に関わるものの三種に大別されるという。また副葬時期は前三〇〇年から前三一四年の間だという。張先生は比較的保存状態の良い竹簡を手に取って、これが呉語に見える呉王の発言を記した部分に該当するといった具合に、詳しく説明してくれた。

この慈利楚簡は張先生がほぼ独力で整理と解読に当たっているとの話だったので、報告はいつ頃公刊される予定なのか訊ねたところ、竹簡の保存状態が極めて悪く、解読が困難を極めているため、公刊の目途は全く立っていないとの回答だった。

慈利楚簡の意義

これまで慈利楚簡に関する確かな情報は、最初に『文物』一九九〇年第一〇期に載った発掘簡報以外には、ほとんど日本に伝わっていなかった。だが今回の訪問で判明した慈利楚簡の内容は、古代思想史を研究する上で極めて重要な意義を持つ。そこで慈利楚簡の意義について、以下に若干の説明を加えて置く。

王充が「国語は左氏の外伝なり」（『論衡』案書篇）と述べるように、古来『国語』と『左伝』は、ともに左丘明の作であるとして、両者の間に姉妹篇としての密接な関係を想定するのが伝統的な考え方であった。だがこうした見方に対しては、『左伝』を劉歆の偽作と断定する清末公羊学派を始めとして、様々な異論も出され、議論百出の状況が続いてきた。

スウェーデンの言語学者カールグレンは、『左伝真偽考』の中で多くの古典籍における助詞の使用法を比較・分析し、『左伝』と『国語』は先秦の古書であり、かつ両者は同一グループの著作としての特異な共通性を備えるとの結論を提出した。このカールグレンの研究成果は、両者が先秦に同一系統の人々によって、ほぼ同時期に編集さ

れたことを、語法の上から改めて裏付けたものである。

しかしこれに対しても様々な異論が唱えられ、さらには近年に至り、『左伝』は前三二六年に韓の宣恵王が称王して以降、韓の朝廷で王権正統化理論として作られたとする珍説まで飛び出す有様で、議論はいまだ決着を見るに至っていない。今文公羊学派の妄説は論外としても、春秋末なのか、戦国前期なのか、中期なのか、後期なのかといった問題がなお残されており、またもともとの材料となった史料が書かれた時期と、最終的に今の形に編集された時期との間に、どれ位の時間差があるのかといった問題も依然として残されているのである。

こうした学界の状況を踏まえるとき、慈利楚簡の発見は極めて大きな意義を持つ。前三〇〇年から前三一四年の間に副葬されたとされる慈利楚簡中に、『国語』呉語が含まれていた事実は、原著が成立してから転写を重ねて世間に流布し、その一本を墓主が入手したのち、死後に副葬されるまでの時間差を考慮すれば、『国語』が戦国中期（前三四二～前二八二年）より前、戦国前期（前四〇三～前三四三年）の早い段階に、すでに成書されていた情況を明確に実証する。

呉語は前四九四年の会稽山における越王勾践の降伏から筆を起こし、前四七三年の呉の滅亡までを記録する。そこで呉語が編集された時期は、前四七三年以降となる。また『国語』が記録する最後の歴史的事件は、前四五三年の知伯氏の滅亡であり、この点は『左伝』も全く同様である。したがって『国語』が今の形に編集されたのは、前四五三年以降、前四〇四年に至る春秋末から、戦国前期にかけての時期となる。

そして上述した『国語』と『左伝』の密接な関係を考慮すれば、『左伝』が今の形に編集された時期も、ほぼそれと同じ期間内に収まると推定される。つまり『国語』も『左伝』も、春秋末から戦国の初めにかけて、すでに成書されていた可能性が高くなってきたのであり、両者の成書年代を戦国中期以降に引き下げる行為は、もはや不可能になったと言わなければならない。『左伝』を劉歆の偽作と断定する清末公羊学派の主張が完全に否定されるのはもとより、『左伝』を前三二六年に韓の宣恵王が称王して以降、韓の朝廷で王権正統化理論として作られたとする平勢隆郎氏の所説もまた、成り立つ余地のないことが確実になったのである。

それでは『逸周書』大武篇が慈利楚簡中に含まれていた事実については、どのような意義が存するであろうか。『逸周書』は『漢書』芸文志・六芸略には「周書七十一篇」と著録され、班固自注は「周史記」と注記する。伝

世本もやはり篇名のみを残す十一篇を含めて七十一篇を存する。『漢書』の顔師古注は、「劉向云く、周の時の誥誓・号令なり。蓋し孔子論ずる所の百篇の余なり」と記すから、劉向は周時の誥誓・号令の類で、孔子が百篇尚書を編集した際に、尚書に収録されなかった残余だと考えたらしい。

その後『隋書』経籍志・雑史類が「周書十巻。汲冢書。似仲尼刪書之餘」と記すに及んで、西晋の太康年間に不準が魏の襄王（在位：前三一八～前二九六年）もしくは安釐王（在位：前二七六～前二四三年）の墓から盗掘した汲冢竹書と結びつけられ、それ以降は『汲冢周書』と称されるようになった。『晋書』束晳伝は汲冢竹書の中に「周食田法、周書、論楚事」などがあったと記すが、『隋書』経籍志は『漢書』芸文志の「周書」と汲冢竹書の「周書」を同じ文献と考えたのであろう。

だが王応麟が「必ず班・劉・司馬・鄭・許の見る所なり。之を汲冢に繫くるは其の本を失えり」（『玉海』巻二十七）と、『四庫提要』が「周書は汲冢に出でず」と指摘するように、班固・劉向・司馬遷・鄭玄・許慎といった漢代の人間がそれを見ている以上、『逸周書』を汲冢竹書の「周書」と同一視したのは、『隋書』経籍志の完全な錯誤だとしなければならない。そこで以後『汲冢周書』の書名は用いられなくなり、『逸周書』の書名が一般的となって今日に及ぶ。

『逸周書』の成立時期については、戦国期の処士の偽託とする点で、諸家の見解はほとんど一致している。これに対して姚際恒『古今偽書考』は、「殆ど漢の後人の為れる所なり」と漢代偽作説の立場を取る。また津田左右吉『儒教の研究　二』（『津田左右吉全集』第十七巻・岩波書店）も、「周官」は燕義、昏義、射義、盛徳、の諸篇、が書かれ竝に逸周書が編述せられた前に存在したことになる。さすれば、これらの書の述作が假に前漢末のおし迫つた時分のことであつたとしても、「周官」はそれよりもいくらか前に書かれてゐなくてはならぬ」（四七八頁）と、前漢末の成立とする。さらに森三樹三郎『上古より漢代に至る性命観の展開』（創文社）も、「漢代に成立した経書のうち、性命の問題を包蔵しているのは、主として禮記であり、これに並ぶものに大戴禮記および逸周書があげられる」（一五八頁）と、やはり漢代の成立とする。

また『逸周書』の基本的性格については、『尚書』周書に準ずる尚書類とする見方や、周時の歴史記録として史類に分類する見方などがあって、いまだに定見がない。このように文献の基本的性格すら判然としない事情が災

いして、谷中信一氏の一連の研究（「『逸周書』の思想と成立について」『日本中国学会報』第三十八集など）を除いては、専論はほとんど提出されてこなかった。だが慈利楚簡の発見によって、その成書年代が稷下の学士が活動した戦国中期より前、遅くも春秋後期から戦国前期にかけての時期であったことが確定したわけで、今後はこうした前提に立って『逸周書』の研究を進める作業が可能となったのである。

管子に関わる竹簡は相当の数に上るそうだが、直接伝世の『管子』と重なる文献ではないとの話であった。上博楚簡の『競建内之』や『鮑叔牙與隰朋之諫』なども、斉の桓公と鮑叔牙や隰朋との物語であるが、『管子』と直接の繋がりはない。恐らく前六四三年に桓公が死去したのち、春秋後期から戦国初頭にかけて、桓公とその臣下たちをめぐる物語が斉で大量に著作されたと思われ、その一部が慈利楚簡中に含まれているのであろう。

『文物』一九九〇年第一〇期に掲載された「湖南慈利石板村三六号戦国墓発掘簡報」によれば、三六号楚墓は石板村の戦国墓地の中では最大級の墓で、墓制や副葬品の分析から、戦国中期前半の下大夫クラスの墓だと推定されている。

また出土した竹簡には一枚の完簡もなく、残簡で四五七片を得たという。完簡の長さは推定四十五センチメートルで、それを基準に推計すると、約八〇〇枚から一〇〇〇枚の竹簡が副葬されていただろうという。竹簡の内容について「簡報」は、あくまでも初歩的な整理による推測だと断りながら、呉越二国の歴史が主で、黄池の会盟や呉越争覇などの記事が見られるとした上で、『国語』や『戦国策』、『越絶書』などと重なる文献の可能性があると予測している。

今回の訪問によって、慈利楚簡の内容が『国語』呉語と『逸周書』大武篇、それに管子に関する文献であることが明確になった。上述したように、この結果は古代思想史研究に極めて重要な意義を有しており、我々にとって大きな収穫となった。協力して頂いた張先生に深く感謝の念を表したい。

（浅野裕一）

五、長沙市文物考古研究所分室

（二〇〇六年九月四日
午後三時四十分～五時訪問）

長沙市文物考古研究所の分室は、長沙市博物館の敷地

の中の建物の一角にあり、前日に訪問した長沙市文物考古研究所とは場所が異なる。ここで我々は、長沙市簡牘博物館館長の宋少華先生の説明を受けながら、洗浄・整理作業中の走馬楼西漢簡牘の実物を見せていただいた。

走馬楼西漢呉簡

走馬楼西漢簡牘は、一九九六年に長沙市走馬楼の八号古井（J8）から出土した。出土した簡牘の数は約二万枚、その内約二千枚が有字簡とのことだが、現在全体の約八割が未整理だそうである。

簡牘に記されていた内容は、大部分が司法関係の公文書で、駅站や官舎管理のものも含まれていた。簡牘の年代は、記されていた暦朔から、前漢・武帝の元朔・元狩年間、すなわち紀元前一二五年～一二〇年頃、長沙王国第二代の劉康（戴王）の時期と推定されている。

なお、走馬楼西漢簡牘については、中国文物研究所編『出土文献研究』第七輯（上海古籍出版社、二〇〇五年）所収の、長沙簡牘博物館・長沙市文物考古研究所聯合発掘組「二〇〇三年長沙走馬楼西漢簡牘重大考古発現」を参照されたい。

簡牘の洗浄・整理作業

我々が見せていただいた簡牘の洗浄・整理作業は、以下の六つの段階に分かれていた。

（一）洗浄作業の行われる前の段階（写真1）

全体に泥などの汚れが付着した二〇枚程度の簡牘が、プラスチック製のトレーの中の水に浸されていた。トレーの中の簡牘は、折れ曲がったり、ねじれたようなもの（竹簡）もあったが、ほとんどはそれほど折れ曲がってはいなかった。但し、その表面は全体的にかなり汚れていた。トレーの底には、簡牘から自然に剥がれ落ちたと思われる汚れがたまっていた。

（二）簡牘の汚れを洗浄する段階（写真2）

水が浅く入ったホーロー引きのトレーの中で、長さ五センチメートルほどの簡牘（残簡？）を斜めにしたガラス板の上に置き、左手に大筆、右手に小筆を持った作業員が、専ら小筆を細かく動かして、簡牘に付着した汚れを丁寧に洗い落としていた（写真3）。作業員が、大筆にトレーの水を含ませては簡牘にかける動作を頻繁に繰り返していたのが強く印象に残った。トレーの底には、簡牘から落とされた細かな汚れがたまっていた。

写真１　洗浄前の簡牘が入ったトレー

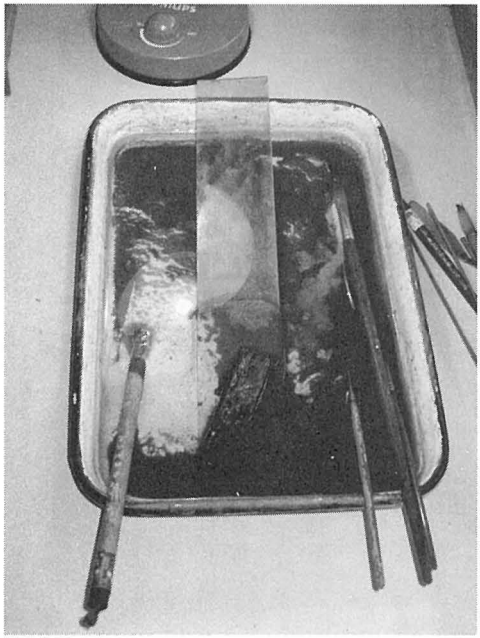


写真２　洗浄作業の行われていたトレー

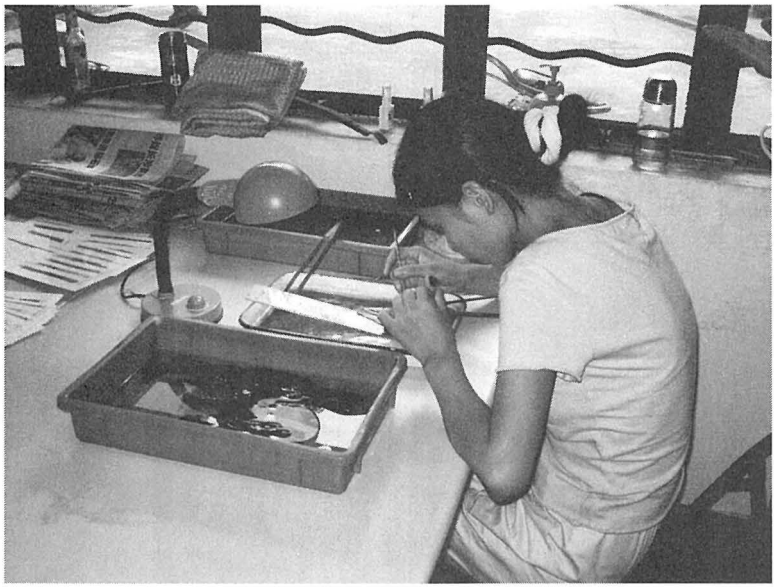


写真３　洗浄作業の様子

写真４　洗浄後の簡牘が入ったトレー

以前上海博物館で故・馬承源先生から窺った話によれば、香港から上海博物館に持ち込まれた戦国楚簡は、大量の水を含んでいて非常に柔らかかったそうである。この洗浄作業中の木牘は、その材質や厚さのためか、それほど柔らかいようには見受けられなかった。

（三）洗浄作業を終えた段階（写真4）

二十枚程度の洗浄された簡牘が、ばらばらになった状態で、プラスチック製のトレーの水の中に浸されていた。ほとんどすべてが、文字の記されていない白簡のようであった。

（四）水入りの袋の中に入れられた段階（写真5）

洗浄作業を終えた六枚の簡牘（長さが約四六センチメートルの長簡五枚と、半分の約二三センチメートルの短簡一枚）が、水入りのビニールの袋の中に入れられ、ステンレス製の蓋付きトレーの中に収められていた。それぞれの簡牘は、表裏の両側からガラス板で挟まれ、ガラス板ごと糸で硬く縛られて固定されていた。

（五）薬水に浸けられた段階（写真6）

やはり表裏からガラス板で挟まれて固定された簡牘が、薬水の入ったステンレス製の蓋付きトレーに入れられていた。簡牘に記された文字は、かなりはっきりと見えた。薬水の成分については分からない。

簡牘は、長簡三枚と短簡三本の合計六枚であったが、宋少華先生の説明によれば、その断面の形状が三角形の山形をしたものと、台形のものとがある。見せていただいた断面が山形の簡牘（長簡）は、確かに山形の片側の斜面に当たる面だけがガラスに密着しており、もう片方の斜面に当たる面には、ガラスが密着していなかった。

（六）簡牘の写真を整理する段階

（写真7…手前の部分）

一枚の写真の大きさはA4程度で、そこには複数の簡牘（残簡を含む）がまとめて写されていた。一枚の写真に写された簡牘の数は、概ね七枚から十数枚程度で、写真の余白の部分には、それぞれの簡牘の通し番号と思われる数字が手書きで付されていた。また写真の端には、簡牘の幅が分かるようにメジャーも写し込まれており、写真の通し番号と思われる活字の数字もあった。

写真の中の簡牘の文字は非常に鮮明であった。おそらく簡牘は、洗浄・保存処理などがすべて終わった後で撮影されたのであろう。

作業員は、複数の簡牘が写っている写真にはさみを入れ、簡牘一枚ずつの写真に切り分けていた。切り分けた写真は、簡牘の大きさに基づいて分けているようであった。

写真5　水の入った袋に密封された簡牘

写真6　薬水に浸けられた簡牘

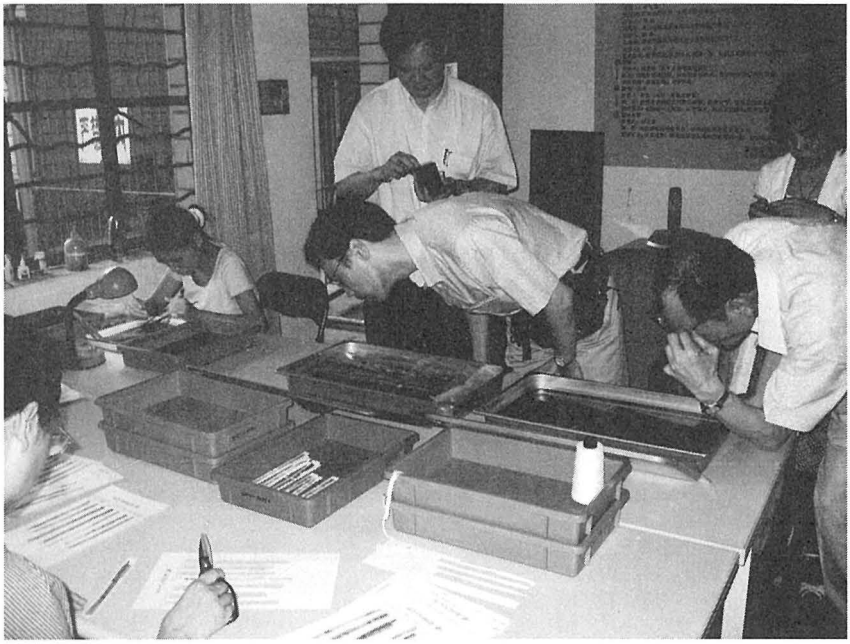


写真7　写真整理作業の様子（手前）

パソコンの画像による説明

続いて、二〇〇三年の一一月に走馬楼西漢簡牘が出土した時の情況、整理の情況などについて、パソコンの画像を見ながら説明を受けた。この時の説明の内容は、概ね以下の通りである。

・簡牘が出土した八号古井の直径は八〇センチメートルで、発掘地点の地層は、下から、古層（基盤）、漢代以降の地層、明代以降の地層に分かれている。簡牘が出土したのは、漢代以降の地層の部分からである。

・発掘に当たっては、先ず重機を使って井戸の周囲を広く掘り下げた上で、井戸を縦に切り開き、その断面から、泥などと一体になって堆積した簡牘の塊を丸ごと取り出した。井戸の中からは、陶器の破片なども出土した。

・ビニールシートのようなものにくるまれて発掘現場から運び出された簡牘の塊は、水をかけながら少しずつほぐして解体された。取り出された簡牘は、層ごとに分類され、それぞれプラスチックのトレーに収められた。

・すぐ隣にある同時代の九号古井からは、何も出土しなかった。

・出土した簡牘の枚数は約二万枚で、そのうち文字の記されていたものは約二千枚であった。文字が記されていない簡牘（白簡）も、いつでも文字を書くことができる状態のものであった。
・整理に当たっている人員は当初二〇名いた。現在は六～七名で取り組んでいる。既に整理作業は十年の歳月をかけている。

白簡の性格

出土した走馬楼西漢簡牘約二万枚は、ゴミとして廃棄されたものであるとの説明があった。この点について浅野氏は、二万枚のうちの大半は白簡で、白簡をゴミとして廃棄する必然性は無いと指摘した上で、走馬楼三国呉簡や里耶秦簡など、およそ古井の中から発掘された簡牘で白簡を多数含むものについては、戦乱などにより役所が撤収したために廃棄されたのではないかとの見解を述べた。この見解をめぐって活発な意見交換が行われ、我々の訪問に付き添って下さっていた陳松長教授も、浅野氏が指摘した可能性は否定できないと認めた。また宋少華先生も、走馬楼三国呉簡が廃棄された原因としては、呉の国内で起きた政変と、魏による攻撃の二つが考えられると述べた。今後の研究により、出土した白簡の性格についても解明されることが期待される。

膨大な作業量

長沙市文物考古研究所分室を訪問し、出土した簡牘の洗浄・整理作業を実際に見ることができたことは、大変参考になった。もとより、郭店楚簡や上博楚簡のように、副葬されたものが出土した場合と、走馬楼西漢簡牘などのように、古井に廃棄されたものが出土した場合とでは、作業の進め方に異なる点もあろう。しかし、出土資料はすべて、その釈読の前に必ずこうした洗浄・整理作業が行われているのである。この作業は、文献の釈読や、或いは簡牘の保存にも大きく影響を与えると思われ、出土資料研究において極めて重要な意味を持つものである。様々な制約があると思われるが、洗浄・整理作業に当たっては、可能な限り適切な処置が施されることを期待したい。

それにしても、二万枚に及ぶ走馬楼西漢簡牘の洗浄・整理作業は、十年かかってもまだ終わっていないという。その膨大な作業量には圧倒される。おそらく今後も更に新たな簡牘資料が出土することであろう。作業に当たられる関係者各位の一層の活躍を切に祈っている。

（竹田健二）